「ラザロ、出て来なさい」ヨハネ福音書１１章３３～４４節

細井 茂徳

本日、私たちは「世界聖餐日」「世界宣教の日」を迎えています。この日に与えられた聖書箇所において、主イエスが「**大声で叫ばれた**」とあります。ヨハネによる福音書の中で、主がこれほどの「**大声**」をあげられたのは、ラザロの墓の前(４３節)だけです。なぜ静かな御言葉ではなく、墓を揺るがす嵐のような大声をあげられたのでしょうか。

３３節３８節の「**憤りを覚え**」の原語「エンブリマオマイ」は、馬が鼻息を荒くして激怒する様を表します。主が怒られたのは、感傷的な衝動からではなく、人間を支配する「死」と悪魔の力に対してでした。「**涙を流された**」(35 節)主は、無力さに泣いたのではなく、死の支配へ挑む勇士として戦いを開始されたのです。

テキストの文脈(11:45-53)は、この奇跡が主ご自身の十字架の引き金であったことを示しています。すなわちラザロの蘇りと引き換えに、最高議会はイエス殺害を決議しました。すなわち、主の大声は「お前の死の代価として、私が命を支払う」という身代わりの宣言だったのです(ヘブライ２章１４～１５節参照)。

マルタとマリアは「終わりの日の復活」という遠い未来の慰めしか持ち得ませんでした(24 節)。しかし主イエスは「私は復活であり、命である」(25 節)と、今ここに届く命を宣言されます。宇宙の原点は「死」ではなく「神の命」だからです(ヨハネ 1:1, 4)。

４４節、手足を布で巻かれた「**死んでいた人**」が、主の言葉を聞いて解き放たれました。主は「[彼を]**ほどいてやって、行かせなさい**(帰らせなさい)」と命じられます。翻って、命を得た者にまとわりつく死の陰(孤立や恐れ)をほどき、歩ませる務めこそが「宣教」です。本日与えられる聖餐は、主が死によって買い取ってくださった勝利の印です。

主イエスは今も「**出て来なさい！**」と呼びかけておられます。私たちは不信仰の墓から立ち上がり、自由な足取りで主の命を世に証ししてまいりましょう。